

主催団体特別賞

「僕の恋人『いなりちゃん』」
ジェレド ヨハン ダイヤー

Mr. Jared Johan Dyer
(アメリカ・高校生)

アメリカ西海岸ワシントン州出身、2007年10月に家族と共に来日。現在北海道富良野高校の1年生。将来の夢となりたい職業の勉強のためアメリカの大学に進学する予定です。人と接する機会を作ってきました。その体験を通じて実感したことお話しさせていただきます。



「ジェレド、いなりちゃんが好きでしょう？」と聞かれた時、「いなりちゃん」は女の子のことだと思って、一生懸命どんな子だったか思い出そうとしました。でも思い出せないので「誰？」と聞いたら、いなりちゃんは人のことではなく、いなり寿司のことでした。また、関西に引っ越したばかりの頃「これなんぼ？」と友達に聞かれて、変な質問だなと思いながら「一つなんですけど」と答えました。友達のみんながぼくのこういう日本語の間違いを聞くと大笑いします。日本語を学んでいる間にこういう面白い間違いが沢山ありました。

日本に来たのは2007年の9月です。来た時は日本語をちっとも話せませんでした。しかし、「それでも中学校に入学したい」という意志を持って、10月の始めに奈良県の大淀中学校に入学し、日本語の勉強を始めました。最初は先生やクラスメートとコミュニケーションをとることが全くなかったけど、みんながゆっくりと優しく説明してくれて、日本語を少しずつ学んでいきました。みんな忍耐強く僕につきあってくれたことに今でもとても感謝しています。

そして、中学2年生の夏休みにまた引っ越し、今度は夏が涼しい北海道に行きました。生徒数600人から10人しかない布部中学校への変化についていくことがすごく大変でした。できたばかりの友達と離れるのがさすがに寂しかったけど、布部の皆が温かく受け入れてくれて、新しい友達もすぐにでき、少人数での授業だったので、日本語もしっかりと学習でき、僕の日本語もかなり上達してきました。日本語が上手と言われたら「ありがとう！」と言うけど、日本人は褒められたらすぐ「いやいや、そんなことはないですよ」という所も僕には新鮮でした。本当は思っていないことを言うのが、他の国と大きく違うところだと思います。学校で先生ともう一人の生徒と一緒に掃除をしていたとき、その先生が「君たちは元気だね。この年になると雑巾がけは私には無理だわ。」とおっしゃいました。そして掃除に集中していたぼくは「そうですね」と生返事をしてしまいました。「違うよ！そういう時には「そんなことはないですよ！」とすぐ答えないといけないよ！」と先生に注意されました。もう一人の生徒は教室の奥でくすくす笑っていました。ぼくの方から「先生には無理ですね」と言い出したらもちろん失礼ですが、先生本人が言っても同意してはいけないのだと学びました。

布部中学校は人数がとても少ないので、果物や野菜の栽培、油絵の授業、地域の方々のかるた大会、ワイン工場、木材工場、そして裁判所の見学のような一般の学校ではできない行事をいっぱい経験しました。また、小さな学校では、僕にさえ、大事な役割が回ってきます。運動会の副団長や、学級委員長も経験し、チームワークとリーダーシップがどれだけ大事なのか気付きました。掃除の仕方、先輩後輩の関係、友達の大切さも学びました。

日本に来て3年近くが経ち、日本にいればいるほど自分が日本人ぽくなっているのを感じます。時々鏡を見て、「日本人の顔じゃない！」とびっくりすることがあります。学校では日本人だけに囲まれているので自分も日本人だとよく思ってしまう。好みもますます日本人のように変わって来ています。音楽は J-POP が好きで、食べ物はジンギスカン、梅干し、餅などが好きです。

今振り返ればまだ若いうちに日本に来てよかったと思います。日本語が進歩したのはもちろんマンツーマンの日本語授業を毎日してくださった先生方と、間違っていた日本語を直してくれた友達のおかげですが「門前の小僧習わぬ経を読む」のように、日本にいただけでも日本語はかなり上手くなります。雨がめっちゃ降る蒸し暑い関西、雪がいっぱいで凍れる(しばれる)北海道。日本の対極の場所に住んで、いろんな経験と友達ができました。学んだ中で一番大事なことは世界には色々な国があって、文化と言語と人が国によってそれぞれ違いがあると気付いたことです。そして、一人一人にも違う所がたくさんあって好みもたくさんあるということです。

まだ二つの言語しか話せないし学ぶことが沢山残ってるので、まだ若いうちに違う国に行って、その国の文化と言語を学び、視野を広げ、国際的な見方と考え方を養って行きたいと思います。これは今日の社会において、特に若い人にとってとても大事なことだと思います。